

## 国家の論理（上）——戦争について（2）

戦争の典型は、社会空間である国家間の武力衝突。「国家」とは何か。なぜ、国家と国家が衝突するのか。国家の存在をめぐる二人の哲学者（ベルクソン、田辺元）の対照的な思想を取り上げて検討する。今回は、ベルクソンの国家否定論に焦点を合わせる。

### 1 「閉じた社会」と「開いた社会」

社会は、「閉じたもの」と「開いたもの」という、異なる二つの起源から成立する。

・閉じた社会——蟻や蜂の社会は、個が全体に献身的に奉仕する「本能」によって維持される。人間社会もまた、個が全体に対する責務によって統制されることで、秩序が維持される。一つの社会は内へと閉じられ、同時にそれによって他の社会と敵対関係に立つ。

・開いた社会——少数の「開いた魂」によって、閉じた社会が開かれる。開いた社会を生み出すのは、家族愛や祖国愛とはまったく異質な人類愛。→①②

全人類を包摂する「人類社会」は、理念にとどまり、現実には成立しない。

### 2 「閉じたもの」と「開いたもの」との〈あいだ〉

異なる起源に由来する「閉じたもの」と「開いたもの」。両者が一つになることはないが、両者の中間、移行状態が存在する。→③

Q.

○国家（閉じた社会）同士の戦争は、なくなるのか？

○開いた社会（人類社会）を実現する途は、考えられないのか？→④

[資料]

### ① 家族愛・祖国愛・人類愛

家族、祖国、人類という三者は、あとのものほどだんだんと大きくなる円のように見えるため、自分の家族や祖国を愛するのと同様、人間は生来人類を愛するもののように考えられてきたが、実は、家族および個々の社会集団以外には、自然の欲した集団はない（ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』森口美都男訳、中公バックス[世界の名著]64、455頁）。

### ② 閉じた社会と開いた社会

閉じた社会から開いた社会へ、また市邦から人類へは、拡大の途によっては絶対に移れない。この両種の社会は、本質が違っている。開いた社会とは、原理上、全人類を包容するような社会である。この種の社会は、間を<sup>シテ</sup>おいて少数の選ばれた魂によって渴望され、幾次にもわたる創造のたびごとにその幾分かを実現してゆくのであって、こうした創造は、そのおのおのが人間を何ほどか深く変えることによって、それまでは越えられなかった困難を越えさせるのである。だがこうした創造の力で円がつかの間開かれても、そののちいつもふたたび閉じてしまう。（488－489頁）

### ③ 閉じたものと開いたものとの〈あいだ〉

「閉じた魂と開いた魂の間には、開かれゆく魂がある。座っている人の不動と、走っている同一人の動との中間には、彼の起き上がり、つまり彼が身を起こすときにとる姿勢がある。要するに、静的なもの<sup>と</sup>動的なものとの中間には、道徳においてもある移行状態がみられるのである」（276頁）。

### ④ ユダヤ教からキリスト教へ

「たとえばイザヤのように、普遍的正義に想到しえた人もあったが、それは、神によって他の民族から選別され、また契約によって神に繋がれていたイスラエルが、それ以外の人類を越えて高く擡<sup>ぬき</sup>いで、早晚、すべての模範となるものだったからである。……第一の前進がヘブライの予言者宗教に負っているとすれば、この第二の前進、閉じたものから開いたものへの移行がキリスト教のおかげだったことも、疑いないと思われる」（288－289頁）。

Cf. 「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」（国連ビルの礎石に刻印された『イザヤ書』2章4節）。